

い景観である。右にトラスバースして急斜面を登りきると小ピークに達し、祠を左に見送ると、右手に石室がみえる稜線にヒヨックリ飛び出た。祠に戻り安全登山を感じ謝すると、そこには江戸時代などの古錢があった。

袴田を迎えてゆっくり石室に向かう。ここも12年振りだった。あの時は毛利、杉澤、大橋（退会）の4人で冬の鋸岳をやつて3日目に石室に泊まつたのだった。翌朝早く起きて朝食の支度をしていふと、前日遅く到着したパートナーが「うるせーぞ、いい加減にしろ」と怒鳴った。こんなトラブルは山でしばしばあるが、それを主張するなら別のところに泊るべきである。

石室（大きな花崗岩を積み上げて作つた文字通り石の小屋で4人用エスパースが楽に4つ位張れる広さ）を覗いてみるとまだ誰もないでの、右奥の雪の吹き込んでいない乾いたところにテントを張り早々と中にはいる。コンロに火をつけ、とにかく腹が減つているので何でも口にほおりこめば元気も出てリラックスしてくる。袴田が「これを飲みましょか」といって差し出したのは、何と！ア

ルミ製の水筒に入り程よく冷えたワインだった。おお！何とスバラシイ！こんな所でワインが飲めるなんて！これではさぞかし荷物も重たかったであろう。ご苦労さまでした。程よく冷えたワインの味は、筆舌に尽くしがたく、この世のものとは思えないくらい実にうまかった。

夕げは、赤飯を食べ、飲みながら好き焼きを作る。袴田も昨夜の苦い経験にもめげず大いに飲み語つた。やはり女性の話題が多くにぎやかだった。袴田とは年齢差もあり当初どうかなと思ったが、いろいろ話すうちに打ち解けていった。

18時20分戸台にいる中発隊と定時交信。山田も用意していたのですぐコンタクトできた。もうすでに夕食も終わり一パイ入つてゐるらしく舌のほうも滑らかで、免許のない人とも全員で30分も喋つてしまつた。やはりいつものメンバーが揃うと楽しいものだ。意外だつたのは矢部が参加していたことで、最後の打合せにも来かつたので、てっきり不参加と思っていた。傑作だつたのは、栗原が昨夜袴田の儀式に気が付いて「儀式における好み焼きの作り方」を偉

大な先輩としてアドバイスしてくれたことだ。寝る前外に出ると冷たい雪が舞つていた。

12月31日（風雪）
ヘタイム×起床3:00～出発4:45～甲斐駒7:30～45～5合目
9:35～駐車場12:30～三島16:00

外は風雪だつたがヘッドランプをつけて出発。どんな暗くても12年前の記憶は鮮明で迷うことはない。少し明るくなつた6時戸台と交信。7時頃出発とのこと。毛利よりいろいろ心配をいただき

温かい励ましの言葉を送つてもらつた。

（90年5月31日発行機関誌「くろゆり」第18号に収録）

解説

1年前の5月会員の柳下紀之君は、春山合宿の最中剣岳で遭難した。冬山は剣岳を予定していたが、会の体制が整つまで延期され南アでおこなわれた。

握手。記念写真を撮り、地図で下山方向を確認。そして袴田を見送り見えなくなつて私も下山開始。黒戸尾根上部は結構雪も多くひざ上までもぐつた。駒ヶ岳神社には思ったより早く着いた。御参りを済ませると、掃除をしておばあさんが「ごくろうじやつたのう」とやさしく声をかけてくれた。振り返る甲斐駒は相変わらず厚い雲におおわれていた。